

2022年のOPヨーロッパ選手権は、デンマーク・スナボーで43ヶ国、253名のセーラーを集めて盛大に開催された。日本代表の4名は、蒲郡の選考会で最後までワールド入りを争った選手たちであり、準備期間にもワールドチームと合同の練習会やレースを重ねることで実力を高めてきた。それぞれ得意な風域やコンディションがハッキリしている選手たちなので、そのアドバンテージをできるだけ広げ、全員でゴールドフリートに進むことを目標に準備を進めた。

大会会場のスナボーは、ドイツとの国境にほど近い小さな町で、宿泊は3ヶ所のホテルに分割、OPの置き場もマリーナに収まりきれずに公共の公園を使い、ビーチから出艇するなど、明らかに町のキャパシティを越えているという印象であった。高緯度なため心配していた気候については、晴れば汗ばむ陽気の日もあったが、バルト海の水はやはり冷たく、朝晩には10℃を切ることもあり、ウェア選択が難しかった。



日本代表の4名



事前の情報では微風もしくは超強風までいろんな風が吹くと聞いていたスナボーの海だったが、蓋を開けてみれば5-10ノットの軽風に終始した。陸に囲まれた湾なので、どちらから吹いても波は低く、風はシフティー。ただし強弱を伴う大きな風軸の変化もあり、単純な振れタックが通用しない難解な変化に選手たちは苦しめられた。皆無と聞いていた潮流が、実際には結構なスピードで流れていたことも、より判断を難しくしたかも知れない。

それでもレース初日は岩波選手が5-3の暫定2位につけたり、伊藤選手が3位フィニッシュしたりと、日本チームの見せ場もあった。予選6レースを終えて上記の2選手はゴールドフリートに進んだものの、吉岡・後藤の両名はスコアメイクに苦しみ、残念ながらブロンズフリートとなってしまった。かといって、彼らがスタートから消極的なレースを展開した訳ではない。むしろ一線でクリーンなスタートを決めることが多かったのである。

しかしながらその後の展開を有利に進めるためのボートスピードが足りない。伊藤選手がゴールドフリートで胸がすくほどのトップスタートを決めた時も、走っているだけで徐々に艇団に飲み込

まれ、後続集団へと追いやられてしまった。勿論それでもコースが当たれば、まだいくらかは上位で回れるチャンスもあるのだが、たとえ完璧なレースをしてもトップ10を走れるチャンスはないのが、いまの日本チームの実力と言わざるを得ない。女子フリートではまだ戦えていたが、昨今の男女差を考慮すると、だいぶフリートの実力に開きがあると思われる。

最終成績は伊藤音人39位（ゴールド）、吉岡晴月100位（ブロンズ）、後藤大志123位（ブロンズ）、そして女子の岩波萌夏33位（ゴールド）であった。42条ペナルティーやUFD、BFD、さらに掲示の確認不足によるDNEなど、もったいない失格で順位を落としてしまったのが悔やまれる。普段通りのレースを心がけようと何度も繰り返し伝えていたが、国際レースで普段通りのレースをする難しさを身にしみて学んだのではないだろうか。

ワールドチームもそうだったように、フルパワー以下のコンディションで、我々は世界のボートスピードの進化に取り残されてしまっている。スピードのないヨットレースほど難しいものはない。思うような成績を残せなかったとしても、それで選手を責めるのは酷だと感じる。最低でもフリートについて行けるスピードがなければレースにならないのだから。そのスピード差が使っている道具から来るのか、セッティングなのか、走らせ方なのか。レースに参戦するだけでは、きっと答えは分からないだろう。

陸続きのヨーロッパ各国は、日本でいえば県を跨ぐ感覚で他国へ遠征できる。日本の選手たちが他県への遠征を重ねて強くなるのと同じ理屈で、ヨーロッパの選手たちはテクニックやノウハウを、国を跨いで共有しているのである。我々は井の中の蛙にならないよう、有望な選手やコーチを海外に送る、もしくは日本へ招く試みを継続しなければならない。幸い日本はタイやシンガポール等、アジアの強国と地理的に近いというメリットもあるのだから。



コーチボートをシェアしたイギリスチームと

今回の日本選手団はレースの2日前に現地入りし、チャーター艇を受け取って僅か1日の練習で本番を迎えた。選手の親が引率するスタイルでは、仕事の関係でどうしても滞在日数が短くなってしまふ。タイトルを狙うような国は、少なくとも1週間前には現地での練習を開始している。子供たちが夏休み期間なのであれば、少なくともあと数日早く現地入りし、十分な準備と練習期間を確保したいところだ。今回は保護者兼コーチという特殊な立場であったが、来年以降はJODA、保護者、コーチの役割が今より補完しあって、選手たちがさらなるパフォーマンスを発揮できる遠征ができるよう願っている。